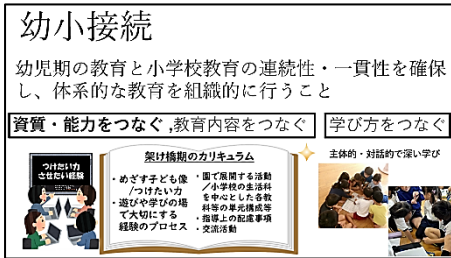


幼児教育と小学校教育との接続 目標3

「第2期 しまねの学力育成推進プラン」子どもが「できた・わかった・やってみよう」を実感できる授業づくりにおける目標3より、特に「幼小接続」の視点について示しています。

1 幼小接続とは



平成29年告示の幼児教育施設3要領・指針や小学校学習指導要領では、育成をめざす資質・能力（何ができるようになるか）を、幼児教育から高等学校教育までを通じて系統的に示すとともに、「主体的・対話的で深い学び」（どのように学ぶか）を共通で示すなど、学びの連続性の一層の確保が求められている。

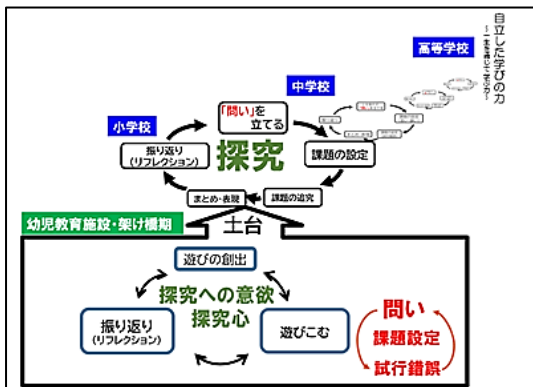
このことを受け、島根県では、幼小接続を「幼児期の教育と小学校教育の連続性・一貫性を確保し、体系的な教育を組織的に行うこと」、詳しくは「資質・能力をつなぐ」、「教育内容をつなぐ」、「学び方をつなぐ」と規定している。そのうち、「資質・能力をつなぐ」、「教育内容をつなぐ」については、各市町村の「架け橋期のカリキュラム開発」の支援から具体化に努めている。

架け橋期のカリキュラム内容例

- (1) 小学校区でめざす子ども像/つきたい力
小学校区の架け橋期の教育が向かう先を明らかにし、組織的な取組とする。
- (2) 遊びや学びの場で大切にすることの経験のプロセス
(1)の育成に向け、遊びや学びの場における経験のプロセスを検討し、架け橋期の教育を体系的なものとする。
- (3) 幼児教育施設での活動・小学校の各教科等の単元構成等
(2)のプロセスに応じて、幼児教育施設の活動と小学校の各教科等の教育内容を構成する。
- (4) 指導上の配慮事項
(2)のプロセスを深めるための先生の関わりや、環境の構成・環境づくりを明らかにする。
- (5) 子どもの交流・教員等の交流

2 学び方をつなぐ

「学び方をつなぐ」うえで、島根県では「問い」を起点とする「探究の学び」を中核に据えている。



① 架け橋期の子どもの学びの重点

この時期の重点は、直接的な体験を通じて「心が動く」瞬間を大切に、自ら周囲の環境に働きかける「探究心」「探究への意欲」の育成に努める必要がある。そのために、保育者や教師は、遊びや生活科等における具体的な活動や体験の中で、「自分で答えを探したい問い」や、「課題」が生まれるよう、環境構成、状況設定、言葉がけに特に意を用いる必要がある。この「自ら問い、やってみよう」意欲の醸成が、後に続く「探究の学び」の土台となる。(図1)

② 「問い」発生への理解

「自分で答えを探したい問い」は「知的好奇心」から生まれてくる。そのため、架け橋期には「心を動かす体験の質を上げる」ための環境構成や状況設定の工夫が求められる。また、「生まれた問いを逃さず拾い上げる教師(保育者)の応答」も重要である。

その際、問いが現実の状況と「理想」「経験」「他者」「空間」「時間」等との比較による「ずれや隔たりの認識」から生まれることを理解することは、応答の質の向上に資する。(図2)

このことは、国語や算数等の探究的アプローチ上にも極めて有効な視点になるものと考えられる。

